北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

菅 季治 ; 「文芸的心理学への試み」序説(その6)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小田切, 正 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00008081

情緒障害教育研究紀要　第19号　2000年

菅　季治；「文芸的心理学への試み」序説（その6）

A Study of Sueharu Kan, A 1940s Philosopher (6)

小田切　正(Tadashi Odagiri)*

本稿の目的は、ひきつづき菅　季治（1917～1950）の戦中における生活思想、哲学のもつ意義をあきらかにすることである。菅の哲学研究の命題は、「ものははたらく　はたらきは矛盾的自己同一　関係　関係のろんり」の追求であり、「なる　動く　はたらく」、または「生成・運動」論の探求である。では、その「論理」は、どのような「はたらき」を対象化して、みちびかれたものかが、重要な、菅の哲学研究の課題となる。本稿では、とくに「人生の論理」（1950）「哲学の論理」（1950）のなかから、学問研究のあり方として、なにを探求し、なにを方法・内容としているか、をあきらかにするとともに、彼の戦中における研究・実践の一つの到達点をしめした。また、菅の西田幾多郎にむけられた批判点、ならびにコミュニケーション（交わり）論も、あらためて着目すべきものとしてとりあげた。

（キーワード：菅　季治　関係・関係のろんり　西田幾多郎　「弱い魂」）

1．「はたらくもの」の「論り化」をめぐって—菅と西田幾多郎の場合—

前号の「主体—主体の自由な関係—おそろしく貧弱な社会を超えて」のさいごに、菅のとらえた「場」とはなにかについて、つぎのことを書いておいた。

「（その）場とは…他者との関係のなかで自分が存在し、生きていくことができ、またありかたが、創造されていく、その関係的世界というべきものである。」

「…場とはまさに主体として自立した人間どうしのつきあいの交流の現場であると同時に、生活文化の自由な創造を保障する…くらしの自己確証がなしとげられる…場でなければならない……」

また、この「場」についての追求が、西田幾多郎の「場所的、絶対的論理」にたいする菅の論及であったことについてふれておいた。日記に、菅は「論理の学問としての哲学」「人生の論理としての Ethik」と書き、また「日本哲学の改革のために」、「論理を深めること」と、日々のなかで記している。西田にたちむかうことは、あらたな「人生の論理」を考えるにあたって、さけてはとおれない、まさに一つの対決点であったのである。

素稿ノート（ルーズリーフ）、一束が遺されていることについては、まえに書いておいたが、このなかに、なにかのおりにメモしたと思われる、つぎのわずかな断片がある。

「西田（幾多郎）はこの同一を、“一面において”とか、“根底において”とかいうあいまいな常識論理で説いたりする。たとえば、“すべての物はその根底において同じものが相反すると考えられる”（注「哲学の根本問題」16頁、昭和9年、岩波書店）とか、“相反するものは一面において相同じものでなければならぬと考えられる”（注　同上38頁）とかいうふうに。

この同一は第三者的に客体化され、また静的に共通者とされる。ここに同一は、対する

*　北海道女子大学

両者に共通なもの、一般者の性格をもたされるのである。

物と物とが相働くというには、物と物とがどこまでも相対立するものでなければならない。しかし無関係に相対立する物と物との間には、働くということもない。働くには、なんらかの関係に入らなければならない。(以下、リーフを折半した切れ目に文字が二つみえるが不明)」

ここで推察できるのは、物と物とがどのように相対し、どのように働くかということであり、そしてその関係の論理をどうとらえるか、を問うことである。

いま、このメモからうかびあがってくるのは、そうした個物、個物をとらえ、働きあうとするのに、共通者なるもの、第三者的、一般者(共通者)を必要とするか、ということである。この論争的かまえの、菅の主張というのは、つぎのものである。「物と物とが相働くというには、物と物とがどこまでも相対立するものでなければならない。…無関係に相対立する物と物との間には、働くということもない。働くには、なんらかの関係に入らなければならない」と。

菅の、これまでの主張でいうなら、ある「もの」と、他の「もの」とは、ともにはたらきあうのであって、それ自身、別のものであるが、このはたらきかけるものが、はたらきかけられるという、たがいに矛盾しあった、一つの関係的事態(能動と受動、「はたらきの論理」)をありのままに追求するということでなければならない。いうまでもないが、このことはまた、もの、ひとの相互の「生成」しあう関係をどうつくりだすか、の実践的(はたらきかけの)な課題にまっすぐにつながることでもある。

菅の主題をいまいちどいえば、ものの生成と発展(その相互の関係と矛盾による)の、その相互のむすびあった(相互)移行、緊張、関係の「論り化」を試みることである。そのカテゴリーはつぎのものである。

ものははたらく

はたらきは矛盾的自己同一

関係

関係のろんり

相互にはたらくこの場のなかで、ものの生成と発展、移行の緊張した関係をとらえること、またつくりだすこと、そこに「論り化」(倫理化、Ｅｔｈｉｋ)をめざした、菅の究極のねらいがあったのである。

こうみてくると、さきの西田幾多郎(1870〜1945)にたいする論及で注目しなければならないのは、その関係的事態を「論り化」するには、それ自体「生活実践(生きかたを尊重し、たがいに補足しあい、必要とされる結果を生んでいくいとなみ)」の、困難や障害をはじめから予想してかからねばならないし、そしてまた、そのようなありのままの関係(対立、矛盾)をどうとらえるかにかかわるその意味の、一つの対決だったことである。

菅の、このような「ものははたらく」の意味と、その「関係のろんり」(菅自身の生きざまをふくめ)の具体相については、のちに再びみることにして、いましばらく菅の西田をとらえた立脚点をあきらかにしておこう。多分にこれまでとかさなりあうが――こうして菅のいう「関係のろんり」の意味も性格も、よりうきぼりされると考えられるからである。

日記によると、菅が「哲学の論理」を書き上げたのは1943年11月２日と記されている。(10月２日には「やっと“哲学の論理”の骨組みをつくり上げた」とある)菅の、このときの主題とは、ひとことでいうなら、人間が人間になるのは、どのようにしてか、その「具体的」な「論理」を「自・他」のはたらき、その「自己同一性」のありかたをとおして、追求するというものである。これについては第17号(1998年)でとりあげておいたが、ここでは、西田にたいする批判点にしぼって、あきらかにしておきたい。(以下「哲学の論理」1950年　弘文堂版　による)

西田の立論はこうである。「もの」(個物)

と「もの」が相互にはたらくのはなにによってか―「もの」がはたらくのは「一般者」(西田は「弁証法的一般者」、または「絶対者」とよぶ)の限定するはたらきによるのであり、この「一般者」のはたらきこそが、対立する両者を媒介し、関係づけるものである、と。菅はその意味するものを西田の「日本文化の問題」1940年　岩波書店)等から、つぎのものをひきだしている。

「物と物とが相働くと云ふには、物と物とは何處までも相対立するのでなければならない。併し単に無関係に相対立する物と物との間には働くと云ふこともない。働くと云ふには、何等かの関係に入らなければならない。何等かの関係に入ると云ふには、両者に共通なものがなければならない。両者は、それに於て一でなければならない。例へば、物体と物体とが空間に於て相働くには、物体は共に空間的でなければならない」(同書、16～17頁)「個物と個物とが相互限定すると云ふには、そこに空間関係の如きものが考へられねばならない。絶対的空間という如きものが考へられねばならない。個体と個体との相互限定の場という如きものが考へられねばならない。」(「哲学の論理」43～44頁による。原文のまま。傍点は筆者のもの)

それについて、西田は、さらにつぎのように述べている。

「互に相対すると云ふには、そこに相互の媒介作用というものがなければならぬ。かかる媒介作用と考へられるものは、一面に両者を対立せしめる意味を有すると共に、両者を統一する意味を有ってゐなければならぬ。」(「哲学の根本問題」　15頁　傍点は筆者のもの)

こうみてくると、問われる「根本問題」とは、おのずから「もの」(「ひと」について考えてみよう)のあり方、ひいてはその相互関係、そのはたらきを成り立たせるものはなにか、というまさにこのことである。西田の場合、その関係、そのはたらきを「限定する」もの、媒介するもの、それが「一般者」「場所的・絶対的空間」と解されるものであり、この媒介者のはたらきがあって、「個物」そのもの、そのなりたち(統一)とその相互の関係ができあがるというのである。これにたいする菅の問いは、つぎのものである。

いったい「もの」のなりたちと、「もの」の相互関係を追求するのに、そうした両者を媒介する「一般者」「(場所的)絶対者」なるものがはたして必要か、この論究のちがいが西田哲学とわたくしたちとのあきらかな「へだたり」であり、「ズレ」というべきものだというのである。その「へだたり」「ズレ」とは、すなわちつぎのものである。

「もの自身のはたらき」をもの自身から切り離し、「外面的な第三者」(注「超越なるもの」「絶対者」)のはたらきそのものとすること、したがって西田のいう「媒介者」のはたらきとは、究極のところ「個物」をたんなる「個物」とし、徹頭徹尾、それ自身はたらきをもったものとすることがないのが、この「カラクリ」だ、と。

こうして、「もの」のはたらきをもの自身のものとすること、その相互のはたらきを、その相互関係のものとすること、いま求められるのは、このありのままの論理を執拗にあきらかにするのでなければならないというのである。西田哲学の、そうした「カラクリ」にふれて、菅は、つぎのように指摘する。

『(上略)ものははたらくことによってのみ「独立し」、自分自身になるのである。はたらくものにとってどこまでも内面的なのである。ものは、はじめから必然的にはたらくものなのである。そして、このことは、はたらくことが、ものをそれの他者から区別する、

という論理的意味をもっているかぎり、あたりまえのことなのである。だから別にものをはたらかせて関係づける第三者の存在など必要はないのである。そうしたものは、もの自身の主体的な内面的なはたらきを客体化し外面化してしまうカラクリなのである。』（同書４６頁　傍点は筆者）

つづいて「他の個物」「他者性」とはなにかについて、その他者と相対した成り立ちと、たがいの「堪え通した」関係をどうつくりだすかにふれて、つぎのように書いている。

『或るものがまさにそのものであること、ものの自己同一は、ものが自分の他者と相対立し、相はたらくことによって成り立つ。しかもその相対立し、相はたらくことそのことにおいて、ものは自分の他者と一つになる。つまり、矛盾。したがって、ものの自己同一は、矛盾を通してのみ成り立つ。（中略）たんなる自己同一がもののほんとうのすがたではない。たんなる自己同一、区別なしの自己同一…はたらきなしの自己同一は、レッテルだけの自己同一、うその自己同一である。「矛盾は Aufheben されねばならないけれど、その Aufheben された矛盾とは、抽象的な自己同一ではない」（ヘーゲル）のである。

矛盾の Aufheben とは、それを免れ避けることではない。その痛み苦しみを進んで自分の身に受けて、それに堪え通すことなのである。そして、そのような意味で矛盾を Aufheben した自己同一こそが、私たちが見出した原理なのである』（同書、49～50頁　以上は「哲学の論理」第１部　原理　１「もののほんとうのあり方」の（２）「矛盾的自己同一とは、具体的には、はたらいて自分であろうとするあり方である」参照のこと）

現実の生活世界は、あくまでも「もの」（ひと）と「もの」（ひと）が相はたらくことで成り立つ世界である。これが、「もの」がはたらく普通の「あたりまえ」の世界である。こうした「あたりまえ」のいとなみをみるのに、「一般者」の限定ということなしに「もの」はありえないとし、「媒介者」「一般者」なるものをもってくるというのが、西田の「カラクリ」、そのかくされた本質だというのである。

ここまでくると、西田にたいする菅の追及は、ほぼいいつくされたといってよいであろう。「もの」と「もの」が相はたらくというのが、まさにわれわれの生活世界であり、この生活のありのままをとらえ、その関係的事態を「論り化」するという、この一点の作業が、西田哲学と一線を画する、菅のまさにものの把握というものである。菅のいう「生成・運動」（「なる、動く、はたらく論理」）論とは、したがって、どこまでも「もの」のはたらきは、ものに属するのであって、またその「内面」のはたらきによるほかないという、「論理」の追求そのものとなっている（注１）。

こうして「もの」が相はたらき、「相手の内面におよぶ」（菅）結びあいをつくっていくというのが、菅のまた「生成・運動」の世界でもあったのである。そのたがいのはたらきは、痛み、苦しみを堪え通し、結びあっていくほかなし、またこの、ひとの関係的世界を鮮烈にえがいたのが、さきの一文といってもよいものである。菅のことばをもういちどあげておこう。

「（そのはたらきの関係をとおして）たがいの痛み苦しみを進んで自分の身に受けて、それに堪え通すこと…そのような意味で矛盾を Aufheben した自己同一こそが、私たちの原理なのである」と。

「もの」の「はたらき」というこの世界がもつ繊細な関係的事態に迫る試みは、われわれにはかりしれない、人間のつきあいに必要とされる、豊かな地平をきり開くものと考えられてくる。それはどのような意味だろうか、いまいちど「人生の論理」にたちかえってみよう。

2　「弱い魂」再読
―他者と自己同一のあいだ―

「人生の論理」六　「弱い魂」の書きだしはつぎのものである。

「どの位わたくしは傷つき易いのだろう。…わたしは心臓の表皮が薄過ぎる。想像力が不安である。絶望が容易に来る」（アミエル注「アミエルの日記」1851.4.6）

弱く傷つき易い魂。気弱、内気、小心、細い神経…。論理的に言えば。他から否定され易く、また自分から自分を否定しさえする魂。そのような魂の生態をしらべて見る。

18号でも紹介したが、この展開は、（a）一般的生活（b）他人とのかかわりにおける弱い魂（c）けれども、弱い魂だって生きてゆかねばならない。どのようにしてか？のそれぞれについて、詳述している構成となっている。この気弱、内心について、小心、細い神経…（そして菅の「魂の生態」についていえば、自由、良心、進歩と平和、歴史、闘い、いのち、生きること）について、菅のとらえた各節の特徴的なものは、つぎのものである。（以下（a）から（b）（c）へ）

『このような魂は、自分の自己同一の確かさを信じ得ない。また、自分が完全なあり方にあるとはどうしても思いこめない。自分が否定され、自己同一を失うことへの不安、恐れがたえずつきまとうのである。（このあと「彼岸過迄」から須永の“弱い魂”について）（中略）アミエルは、自分の魂のあり方をよく知っていた

「（上略）――生きず闘わず行なわず済むこと、これがいつもお前の秘かな願いである。お前の十字架は意欲することであり、お前の嫌悪は思い切ってやること、寧ろ冒険することである。（注、以下本文はつぎのようにつづく。「…周囲の状況の束縛や人々の勝手な真似に服従すること、自分の無力を見せつけられてお前とは似もつかない人間となるために…お前のうちに肉体的な反感と、天性的な反抗を巻き起す。…）「アミエルの日記 1865.8.13」

（上略）こうして自分の行いや仕事について…弱い魂にとっては、或る物事に慣れること、それらを自分のものにしてしまうこと、従って自分にたいする否定性を取り除くことは、なかなか易しくはないのである。』（（a）から）

「他人は自分ではない、また自分は他人ではない。けれどもこれだけではただの差違関係である。別に自分を倒しほろぼすという対立関係ではない（中略）自分がだまされたり、嘲けられたり、引きずり下ろされたりすること―つまり否定されることへの不安と恐れとで湧くのである。だから弱い魂にとっては、他人と触れ、他人と話しを交えることは、まるで手術でも受けるみたいな苦しみである。（中略）

そしてやはりこの他人の否定性を拡大して感じる気持から、自己卑下・自己劣等感が湧いてくる。（中略）

反対に、他人を超えしのいで、他人の上に立つこと、他人の考えにそむいて自分を主張すること、他人の気を悪くし、他人に迷惑をかけてまで自分の欲するままにふるまうことほど、弱い魂にとって難しいことはない。（（b）から」）

『（1）弱い魂も、始めは自分の弱さ、脆さを認めようとはしないかもしれない。弱さ、脆さは、不完全なあり方であり、自分をそのようなあり方において認めることは、みじめな不快を感じるから。かえって、彼は自分の弱さを示すことさえするだろう。気の弱い子どもは、臆病、小膽と思われたくないために、ナイフで自分の指を切ったり、高い所から飛び降りて見せる。

（2）けれども、偽装は長続きしない。や

がて弱い魂は、事毎につまづき倒れる自分の弱さ、脆さを認めなければならなくなる。そしてそのように偽らない自分の魂のありさまをよく見つめる時にこそ…また自らを励ます気もちも湧くのではなかろうか。（中略）そのように、積極的活動へと自分をはげますと共に、他方では、外から来る刺激にたいして皮膚を強化して置くことも必要である。((3)—「しかし、自分をはげまし強めようとするこの自家療法は、必ずしも効果を挙げ得ない。そうした時、人は自分の生きる力の、どうしようもない限界を感じる。（中略）他人との交わりにおいても、事を構えて争うことなどは思いも寄らない」)（4）—「他との交わり」を避ける「孤独な生き方へ」)

（5）…全くひとりぼっちということ—これは、人間として生きることを止めたあり方ではないか、否定する他のものなしの自己同一もないし、比較なしの完全への欲望、つまり生きることが成り立ち得なくなる。きみの心だって人間へのノスタルヂアにうずくにちがいない。（中略）そして事実、生きている限り、全く孤立ということは不可能なのであって、きみの方では世間を去ったつもりでも、世間の方ではきみをそっとしては置かない。…「それでは、わたしのような魂の救われようはないではないか？」ときみはここで苦しく叫ぶかもしれない。けれども救われた弱い魂もないわけではない。（以下略）』((c)から。「人生の論理」116～135頁　以上の全文については、第15号中の資料を参照のこと)

さて、少しながい紹介になったが、ここで菅が援用しているのは、夏目漱石、ドストエフスキー、アミエル、芥川竜之介、ゴーゴリー、伝記作家（セザンヌ、キュリー、メリメについて）、石川啄木らの作家群からのもので、人間精神の実例を読む文芸的・批評的な解析の、心理学的試みである。

だが、ここにおける菅の主題とは、あくまでも「はたらいて自分であろうとするあり方」の問題—他者との「交わり」の具体的な（肯定的、あるいは否定的なさまざまな）あり方の問題であり、それによって、いかに自分のたしかさ（自己同一）が得られるかの普通の日常の問題といえるものである。そうした他者との「交わり」のなかで、自分が否定されることが少なければ少ないほど、また肯定されることが多いほど、それだけ、自分のたしかさが得られるというものである。

このような具体的な、日常の「交わり」のなかでは、同時に他者の身になって考える、あるいは考えねばならないということがあるし、それには、他者のことばだけでなく、そのふるまいかたや表情といった、他の表現によって理解をふかめるということが、どうしても必要になる。こうして１人が１人と対話するということでも、たいへんな苦労がいることがあるし、他者と出合い、共感しあったたしかさを得るというのは、じつに「交わり」の世界の、大きな課題なのである。したがって、他者としっかり対話もし、「交わり」をもつというのは、普通の日常のなかの、さまざまな困難や障害をも予想した、本来、追求されねばならない方法的な問題でもあるのである。

菅のいう他者との「交わり」「うごき、はたらき」について考えると、複数（集団）のなかの自分のありかたをみつめなければならないということがある。不安やおそれといったことは、そのばあい、とうぜんなことであり、気配りや意見の対立（肯定的であるより、否定的な対立をふくめ）が起るし、それをどう調整するか、おのずからその解決のしかたが必要となる。こうした人間関係の順調なあり方ばかりでない、その引き裂かれた矛盾のなかで、まさに菅が指摘するような、他者とのあたらしい出合いや、「自分の立て直し」（菅）をはかることが、いやおうなしに求められることになる。

その「立て直し」をどうはかるか、いや、はかることによって、あらたな自分との出合いや「もの」とのつながりをつくる肯定的な作業に

とりくむことができていくものなのである。そうした「裂け目」や「矛盾」(「自己同一」を失うという)に出あって、人や「もの」との新しいが形づくられる、その「立て直し」とは、やはり「はたらくもの」と「はたらきかけられるもの」とのよりふかい関係や結びなおしをとおしてだというもあきらかである。

たしかに、菅が述べている「弱い魂」の「心理学的実例」は、必ずしも、このような課題にじゅうぶんこたえたものとはいえないが、他者との関係性を軸に、豊富な事例(文芸的、心理学的な)による、あらたな哲学的、心理学的な課題を模索したその試みは、いま学問研究のありかたや、対象性を問うものとして記録されねばならないことでもある。日記に、菅はつぎのように記している。

「…自分を否定する外の条件が相かわらずがんばっている…。やはり、はたらいて、つくって、外へ出て、自分でないものを自分のものにする—自分をひろげる。それがほんとうの救いなのだ。」と。(1943.8.30)

「弱い魂」とは、菅によれば「弱く傷つき易い魂…論理的に言えば、他から否定され易く、また自分から自分を否定しさえする魂」である。「自分を立て直し」、他者とつきあい、そのつながりをつくっていくための方法的、人間的な探求は、おそらくこれまでの学問研究のありかたを超える場のひろがりが考えられるし、またそのような場の研究をつくりだしていくことが、いま切実にもとめられている。未完のような、さきの菅の人間記録に(たしかに菅は、「弱い魂」に必要とされるものとして「意志の単純化と緊張化」をあげているが)いま一つの応えを見出すとするなら、「やはり、はたらいて、つくって、外へ出て、自分でないものを自分のものにする——自分をひろげる」——この「原理」を立場に新しい、創造的な、共同的(集団的)な出合いのものとしてつくりだしていくこと、菅がしめしているのは、このよびかけだ、と思われる。痛み、苦しみのなかの、この「原理」の追求は、また癒しの意味をもった人間関係の追求といってもよいであろう。

さて、菅のいう「弱い魂」をみるには、いま少し、マクロな理解が必要と思われる。ひとことでいうなら、ひと、ひとのヨコの関係をとらえた心理学なアプローチも、その関係把握も、その観察力も、生き方への「論り化」(倫理化)も、すべてが、弱い人、「弱者」の立場からの論理の設定であり、その原理の追求だといえるものである。

いま西田幾多郎の哲学を「強者」の規範の哲学といういいかたをすると、菅のは、まことに「弱者」の立場からする哲学といってよいであろう。菅の着眼点は、どこまでも生活のあれこれをかかえ、そのなかの矛盾や対立(ぶつかりあい)にどうつきあったらいいか、日常の苦しみをもった、ひと、ひとの視点であり、それが足場であることである。そんな日常の、さまざまなもつれや、葛藤や人間の「すき間」につき動かされてじつに苦しんだのも、菅だったと思われる。

そうしたゆさぶられるような、時代の矛盾や「裂け目」や葛藤になやまされ、苦しんだ人間だけに、鋭敏で繊細な着想が一つの形をとったとき、その時代に対抗し得る、独特の細い道(思想)を産出するというのもたしかなことだ、と思われる。

菅の日記につぎのものがある。

「のがれることではなくしりぞけること。どんなに深くても自分に沈むこと、自分を傷つけることが無意味であると知れ。生産的であること、これがおまえの救いだ。(中略)

私は自分の運命のつらさをなげく資格などないのだ。神が私の魂の弱さを知って、かばってくれるかのように、easy-goingで今まで生き得た。…

私たちの時代のみじめさは、美しい魂が弱くて、逞しい魂が厚い皮をもっていることに

も示されている。(中略)

Allgemeingiiltig に生きること—人間そのものとして。

おまえは、相手に迎合して、相手の気に入り、相手を笑わせることを心がけている。そして、そのためには、自分を卑しめ低めることだってかまわない。それなのに大して効果があがらず、自分が他人から愛されないことを不平に思っている。愚かな話だ。」と。(1943.9.8)

「しりぞける魂」「みじめな(美しい)魂」と「逞しい、厚い皮の魂」とのあいだで、苦しんだのが菅であり、その「すき間」のなかで、いのちの苦悩をかかえこんでいたのも、菅だったのである。菅が、愛読したばかりでなく、時代と自己をつなぐ一つのフィロソフィとなったと思われるアミエルは、時代の受ける苦悩をみつめて、「人の胸は矛盾に他ならない」として、つぎのことを書いている。

「(上略)現在はつまらないもので現実は我々を欺くといふことを自分に言ひ聞かすために何百といふ理由を擧げる。かういふ風にいつも事が済んでから、間に合はなくなってから、私の眼は自分の生涯の左右を決するあらゆる事柄に開かれてきた。運命に対する私の傲慢はいつも私から明察力を奪って幸福を弄ぶやうにさせた。私はいつも本気なことが、「賽は投げられた」(ラテン語)が恐かった。(以下略)(「アミエルの日記」1859.4.15から 岩波版(一)傍点は筆者)

「…一つの世界を作る為には、何も彼も必要であり、国家に於ては凡ての市民が権利を持ち、一つ一つの輿論はそれ丈では同じ位無意味だとしても、凡ての輿論は真理に参加している部分である。生きると生きさせる、考えると考えさせる、就れも等しく私にとって大きな格言である。私の傾向は、いつも集合、全体、均衡にある。排斥、非難、否と云ふこと、それが私には難しい。但し向ふで排斥する人に対しては別である。私はいつでも、居合わせない人、負けた側、無視された真理もしくは真理の部分の為めに戦ふ。」と。(1869.7.20から 岩波版(二)傍点は筆者)

(次号には『「弱い魂」再読(その2)』、および「シベリア抑留から戦後日本へ——コミュニケーションのはざまで」(假題)をとりあげる予定)

(注)

1)西田幾多郎の、以上の「一般者」「絶対者」、または「超越者」なるものがもつ「日本文化」の意味するものについては、「学徒 菅 季治—その哲学と思想」(あけもどろ会編「ことば 生活 教育」1996、ルック発行 所収)と、第15号(その3)の注記を参照のこと)